

金属製花形小皿の出土事例

大久保 奈 奈

1 はじめに

埋葬施設（土壙内木棺）底面に遺存していた歯列から、壮年後半～熟年の女性という被葬者像が判明している千葉県流山市思井堀ノ内遺跡292号方形周溝区画墓から出土した副葬品には、表面が風化し灰色に見える金属製菊花形皿が含まれていた。思井堀ノ内遺跡は、南流する江戸川を西方に望む南北に伸びる舌状台地上に営まれた旧石器時代、縄文時代（早期後半～前期）、奈良・平安時代から中近世におよぶ遺跡であるが（天野2006・伊藤ほか2010）、台地縁辺部に築かれた292号方形周溝区画墓の年代は、副葬品中の龍泉窯系青磁碗と白磁皿の年代から13世紀後半～14世紀初頭頃に位置づけられている（天野2006）。なお、この墓の西方、110mほど離れた地点においては、鎌倉時代の居館跡が検出されている。

断片化した状態で出土した思井堀ノ内遺跡の菊花形皿は、蓬莱鏡や櫛とともに納められていた出土状況から、化粧道具の一つととらえられるが、どのような特性をもつ資料なのだろうか。その具体像を明らかにする作業の第一歩として、出土品の類例探索を行った。

2 出土品の類例とその形

検討対象とした出土品は、俯瞰した時の輪郭が花形となるようつくられた金属製小皿のうち、見込中央に蕊を表現する突出部があり、その周囲に口縁にむかって立ち上がる花卉を放射状に配した、深さのある小皿である。

実測図を集成できたのは9点であるが（第1図・第2図）、図録等に写真が掲載されている資料4点を加えた計13点を検討対象として取り上げた（表1）。参考文献および出土事例・挿図出典欄に掲げた報告書に拠り、これらの資料がもつ特徴を整理する。

13点の出土品について、まず、断面図に示された構造上の特徴、すなわち製作技法に関わる情報に着目し、I類とII類に区分した。

I類は、器の体部と高台を別々に作り、1本の鋌脚で両者を結合するという構造上の特徴をもつ資料である（第1図）。出土品としては、福井市一乗谷朝倉氏遺跡出土例（戦国時代）にI類の構造を確認できる。実測図を掲げた6点以外に、第40次調査出土品3点がある（朝倉氏遺跡資料館2009）。

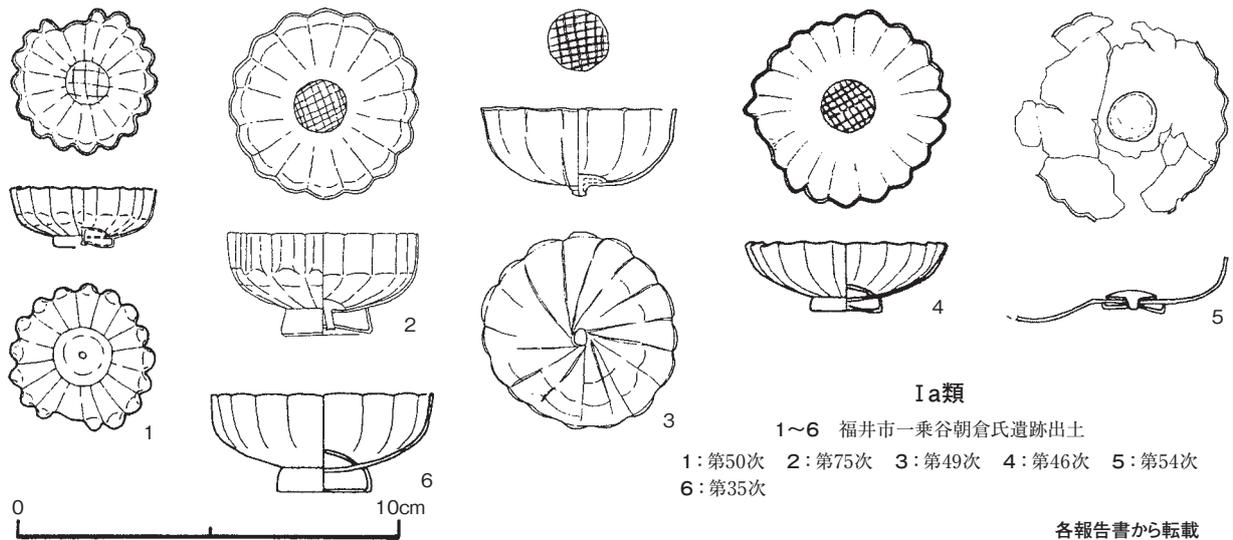
II類は、器の体部と高台が一体に作られるという特徴をもつ資料である（第2図）。神奈川県鎌倉市今小路遺跡第5次調査出土例（中世前期）、由比ガ浜集団墓地遺跡（遺跡No.372）方形竪穴37出土例（14世紀）、広島県福山市草戸千軒町遺跡第25次調査区SE1560出土例（14世紀後半）の3点について実測図を掲げることができた。このほかに外観の特徴からII類に含めうる資料として、京都市稲荷山経塚（平安時代後期）から出土した「錫製楝子」という資料名称¹⁾の類品がある（高橋1912、奈良博1977）。

つぎに、13点の出土品について、俯瞰した時の器のかたち、即ち、輪郭の特徴に注目して、幅の狭い花卉を放射状に配置した「菊花形」と、「五弁花形」の二種に大別した。「菊花形」をa類、「五弁花形」をb類と表示する。

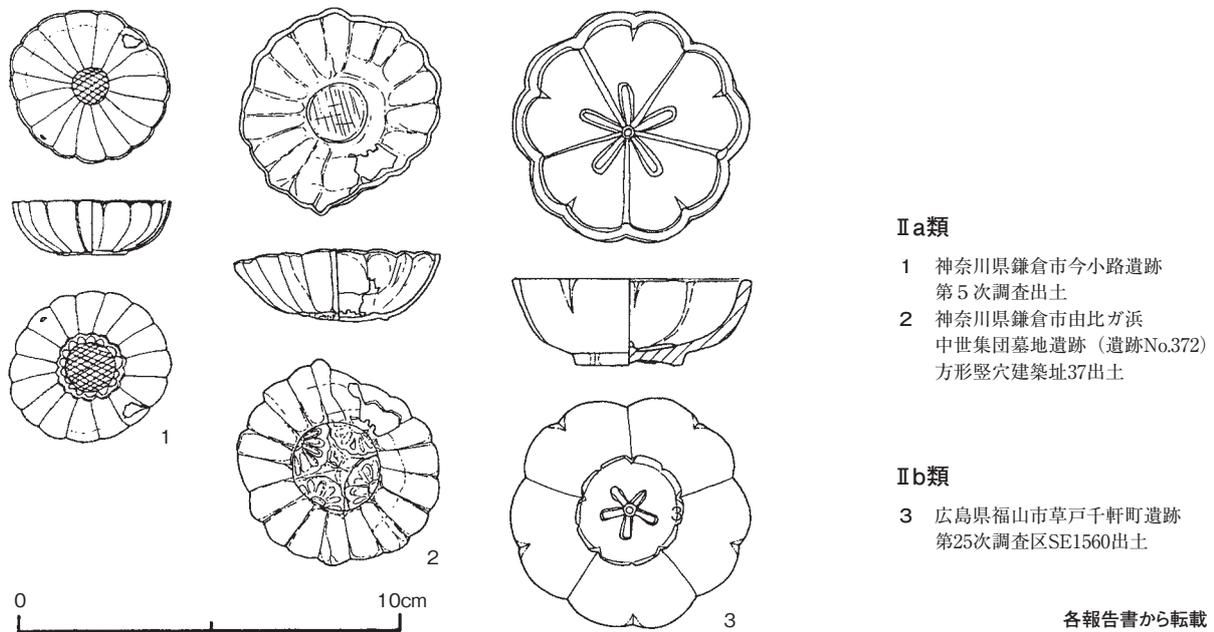
なお「菊花形」の弁数は、今小路遺跡出土例が16弁、歪みが生じ輪郭に不明瞭な部分がある由比ガ浜遺跡出土例が18弁前後、一乗谷朝倉氏遺跡35次調査出土例が推定20弁前後、同46次出土例が20弁、同50次出土例が17弁というように、ばらつきがある。

13点の出土品に対して2つの視点からおこなった以上の区分、構造上の特徴によるI類・II類の区分と、花形の輪郭によるa類・b類の区分を組み合わせ、出土した金属製花形小皿を分類すると、下記の3種に整理できる。

I a類 蕊の造形とわかる甲盛状の円形鋌頭をもつ鋌脚で、菊花形につくった皿の体部に、別作りの高台を結合させたもの。



第1図 金属製花形小皿Ⅰ類



第2図 金属製花形小皿Ⅱ類

Ⅱa類 高台と一体で成形した菊花形皿の見込中央に、蕊を突出部として表したもの。

Ⅱb類 高台と一体で成形した五弁花形皿の見込中央に、蕊を突出部として表したもの。

Ⅰ類とⅡ類で、最も顕著な違いが見られるのは高台のつくりである。

なかでも注目されるのは、Ⅱ類の高台底面に文様が施されている点で、検討対象とした金属製花形小皿を立体造形としてみるならば、高台底面の施文は萼の表現と理解できる。高台底面の細かな文様は、これらの小さな器が裏返した状態でも、人々の目に触れる機会があったことを思わせる。

なお、Ⅰ類と比べて、Ⅱ類とりわけa類は、高台が極めて低い。この特徴は、製作技法に規制された特徴と推測できる。

ところで、立体的な花を模る造形細部に多様性がみられる中で、Ⅰ類・Ⅱ類という製作技法の違いをこえて、共通する特徴を示す要素がある。それはa類（菊花形）見込中央に低く突出する部分で、Ⅰ類・Ⅱ類ともに、円形輪郭内部に格子状の線刻が施されている。この毛彫りは、蕊の集合する様を表すものと考えられる。

一方、b類（五弁花形）の蕊の表現は、a類（菊花形）と全く異なるうえ、検討対象にのぼった2点間において、個体による表現の差が顕著である。草戸千軒

図	出土遺跡名	分類	材質	口径 cm	器高 cm	備考
第1図 1	一乗谷朝倉氏遺跡 (第50次)	I a類	銅	3.8	1.6	一部鍍金
第1図 2	一乗谷朝倉氏遺跡 (第75次)	I a類	銅	5.0	2.7	蕊に鍍金
第1図 3	一乗谷朝倉氏遺跡 (第49次)	I a類	-	5.1	2.3	
第1図 4	一乗谷朝倉氏遺跡 (第46次)	I a類	銅	5.0	1.9	一部鍍金
第1図 5	一乗谷朝倉氏遺跡 (第54次)	I a類	銅	-	-	潰れた状態で出土
第1図 6	一乗谷朝倉氏遺跡 (第35次)	I a類	銅	5.8	2.6	
-	一乗谷朝倉氏遺跡 (第40次)	I a類	銅	5.0	2.3	
-	一乗谷朝倉氏遺跡 (第40次)	I a類	銅	5.1	2.4	
-	一乗谷朝倉氏遺跡 (第40次)	I a類	銅	4.3	1.4	
第2図 1	今小路遺跡 (第5次調査)	II a類	銅	(約4.2)	(約1.5)	(大きさは報告書挿図による)
第2図 2	由比ガ浜集団墓地遺跡	II a類	銀	5.4	1.8	底径2.2cm
第2図 3	草戸千軒町遺跡 (第25次)	II b類	錫鉛合金	6.1	2.4	重さ116.2g。鋳造品
-	稲荷山経塚	II b類	錫鉛合金	6.5	1.3	

材質・寸法・()内以外の備考は別掲報告書・参考文献による。

表1 出土した金属製花形小皿の材質と大きさ

町遺跡出土例では、点状突起であらわした雌蕊を中心として5本の雄蕊を放射状に配している。それに対し、稲荷山経塚出土例の蕊は、細長く尾を引く三つ巴文のような意匠に表現されている。

上記のような構造と意匠の特徴をもつ出土した13点の金属製花形小皿は、いずれも片手で容易に保持でき、手のひらに自然とおさまる大きさにつくられている(表1)。

3 材質

出土した金属製花形小皿の材質には、銀製、銅製、錫と鉛を主たる素材とする合金製の三種がある。また、銅製の事例のなかには、一部に鍍金が施されている例が報告されている。

銀製品は1点ある。由比ガ浜中世集団墓地遺跡方形竪穴37から出土したII a類資料である。

銅製品は最も多く9点ある。II a類の今小路遺跡例のほか、I a類の一乗谷朝倉氏遺跡35次調査出土例、同46次出土例(一部鍍金)、同50次出土例(一部鍍金)、同54次出土例、同75次出土例(蕊に鍍金)、同40次出土3点がある。

錫と鉛を主たる素材とする合金製品には、II b類の2例がある。蛍光X線分析が実施された草戸千軒町遺跡出土例については、構成元素に関する大まかな情報として、銅1.6、鉛14、錫83、鉄1.2、銀0.03という分析値が報告されている(村上・福島1995)。稲荷山経塚出土例についても、ともに出土した山梔玉・平玉とともに「鉛を多く含む錫」と報告されている(高橋1912)。

4 付着物

外面のみならず内面全体に凹凸ある器は、実際にど

のような使われ方をしたのだろうか。器としての機能あるいは使用痕という視点から、内容物に関する付着物の情報、あるいは用途に関する情報を確認しておきたい。

紅の付着が報告されている資料として、一乗谷朝倉氏遺跡35次出土I a類がある。また、同46次出土資料についても「一部において紅もしくはお歯黒らしき付着物がある」という報告がある。なお、同75次調査出土資料については、紅皿か鉄漿皿か不明であると報告されているが、同遺跡の金工品を特集した展覧会図録に掲載されているI a類6点(40次3点、46次・49次・75次各1点)はすべて「紅皿」とされている(朝倉氏遺跡資料館2009)。

一方、お歯黒用「鉄漿皿」という位置づけが与えられているのは、草戸千軒町遺跡出土II b類である。木組井戸SE1560井側内埋土から、青磁碗の中に重ねられた状態で出土した。付着物に関する報告は、青磁碗(径9.4cm、高4.4cm)についてのもので、真二つに割れ漆で継いだ碗内側の継目に紅の付着が認められたと報告されている。

5 おわりに

各地の遺跡出土事例の報告から、金属製花形小皿は、化粧道具のひとつとして、紅皿あるいは鉄漿皿として用いられていたととらえられていることを確認した。と同時に、草戸千軒町遺跡出土事例において、金属製花形小皿と重なった状態で出土した青磁碗が化粧料を用いる際の器として用いられていたことを確認した。

化粧料のパレットとしての機能を考えると、青磁や白磁の方が、平滑な内面をもつという点において、より実用的と思われる。使用後、きれいにするのに難

儀しそうな、内面に凹凸をもつ金属製花形小皿がなぜ、必要とされたのだろうか。見込の凹凸が機能的に求められるような使い方がされていたのであろうか。あるいは、実用に勝る何らかの意図が、立体的に花の形を映すという造形に籠められているのであろうか。

中世の化粧道具のなかで、これらの出土品がどのように位置づけられるかを明らかにするためには、素材と製作技法の確認を基礎として、伝世されてきた神宝類中の類例（春日大社1973、小松1989、奈良博1989、和歌山県博2005）と出土品を比較する作業が必要となる。そして、構造（Ⅰ類とⅡ類）と意匠（a類とb類）、あるいは材質と製作技法にみられる多様性について、出土品と伝世品をともに視野に入れて、時代的変遷を検討することが今後の課題である。

註

1) 明治45年に発表された報告（高橋1912）に記載されている資料名の「楳子」は、唐音で「ちゃつ」と読み、広辞苑には「菓子などを盛る漆器。多くは朱塗りで円形、木皿に似、底に怡土灰のあるもの。銘々盆。」と解説されている。

参考文献

- 天野 努 2006『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1 - 流山市思井堀ノ内遺跡（中世編）-』千葉県教育振興財団調査報告第549集 財団法人千葉県教育振興財団
- 伊藤智樹・栗田則久・落合章雄 2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2 - 流山市思井堀ノ内遺跡（旧石器時代～奈良・平安時代編）-』千葉県教育振興財団調査報告第635集 財団法人千葉県教育振興財団
- 春日大社社務所 1973『春日大社古神宝宝物図録』
- 小松大秀 1989『化粧道具』『日本の美術』No.275 至文堂
- 高橋健自 1912「山城稲荷山経塚及発掘遺物に就きて」『考古学雑誌』第2巻第8号 考古学会
- 奈良国立博物館 1977『経塚遺宝』
- 奈良国立博物館 1989『特別展 古神宝 - 神々にささげた工芸の美 -』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2009『第17回企画展 金工の技と美 - 金属製品にみる一乗谷 -』
- 村上隆・福島政文 1995「草戸千軒町遺跡出土の金属製品の材質について」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 広島県教育委員会
- 和歌山県立博物館 2005『熊野速玉大社の名宝 - 新宮の歴史とともに -』

出土事例・挿図出典

- 第1図 1 福井県教育委員会 朝倉氏遺跡調査研究所 1985『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XVI - 昭和59年度発掘調査整備事業概報 -』
- 福井県立朝倉氏遺跡資料館 2007『特別史跡一乗谷朝倉氏

遺跡発掘調査報告Ⅸ 第49・50次調査』福井県立朝倉氏遺跡資料館

第1図 2 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1992『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡平成3年度発掘調査概要（23）』福井県立朝倉氏遺跡資料館

第1図 3 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1985『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XVI - 昭和59年度発掘調査整備事業概報 -』福井県立朝倉氏遺跡資料館

福井県立朝倉氏遺跡資料館 2007『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅸ 第49・50次調査』福井県立朝倉氏遺跡資料館

第1図 4 福井県教育委員会 朝倉氏遺跡調査研究所 1984『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XV - 昭和58年度発掘調査整備事業概報 -』

第1図 5 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1988『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ 第10・11次、第54次調査』福井県教育委員会 福井県立朝倉氏遺跡資料館

第1図 6 福井県教育委員会 朝倉氏遺跡調査研究所 1980『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XI - 昭和54年度発掘調査整備事業概報 -』

福井県立朝倉氏遺跡資料館 1999『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅶ 第35次、第56・85次、第61・62次調査』福井県立朝倉氏遺跡資料館

第2図 1 河野真知郎 1993『今小路西遺跡（御成小学校内）第5次発掘調査概報』今小路西遺跡発掘調査団 鎌倉市教育委員会

第2図 2 原廣志編 1993「由比ガ浜中世集団墓地遺跡(No.372) 由比ガ浜二丁目1034番地1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9（第1分冊）』鎌倉市教育委員会

第2図 3 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1980『草戸千軒町遺跡 - 第24～26次発掘調査概要 - 1978』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1993『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ - 北部地域北半部の調査 -』広島県教育委員会